

曾 利 遺 跡

—農道整備事業に伴う第七次発掘調査報告書—

序

曾利遺跡は、中部高地における縄文時代中期の
標式遺跡としてつとに知られている。昭和35・36
年、44年、47・48年と五次にわたる発掘調査がな
され、報告書が公刊されているとおり、中期の初
頭から末葉まで営まれた母村的な集落跡である。
その後は、昭和60年に歴史民俗資料館の建設に伴
う小規模な調査が行われたが（第六次）、その成
果は未だ報告できないままになっている。

この度の報告書は、遺跡の末端を横断する農免
道路の建設に先立って緊急調査された第七次発掘
の記録である。なにぶんにも限られた時間のなか
でまとめたものであるから万全とはいえないまで
も、発掘された遺構とその出土遺物を一通り網羅
し、曾利遺跡の実態把握に新たな知見を加えるこ
とができたと思う。

この間、発掘調査ならびに整理作業に御協力い
ただいた関係者の皆さんに心から御礼を申し上げ
る次第である。

平成5年3月

富士見町教育委員会

教育長　名取　剛三

例　　言

- 1 本書は、農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴い、諏訪地方事務所の委託をうけて富士見町教育委員会が実施した曾利遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査および整理作業は、平成4年6月5日から平成5年3月19日まで行われた。
- 3 発掘調査は小林公明・樋口誠司が担当し、本書の執筆および実測図の作製は樋口誠司が行った。
- 4 本遺跡の名称については、昭和53年刊行の発掘調査報告書「曾利」では地点を区別して「曾利南」としたが、発掘の結果その必要が認められないことが判明したのでこれを解消して「曾利」に復した。
- 5 遺構図の水準線は標高861.0mを0とし、高低を十・一で表示した。
- 6 本報告にかかる出土品、諸記録は井戸尻考古館が保管している。

目　　次

序	
例　　言	
目　　次	
1　遺跡の環境と調査の経緯	1
遺　　跡　　の　　環　　境	
調　　査　　の　　経　　緯	
調査のあらまし	
2　遺構と遺物	3
3　調査の成果と課題	10

1 遺跡の環境と調査の経緯

遺跡の環境

曾利遺跡の所在する尾根は、中央東線の信濃境駅付近から南に向ってゆるやかに傾斜しながら



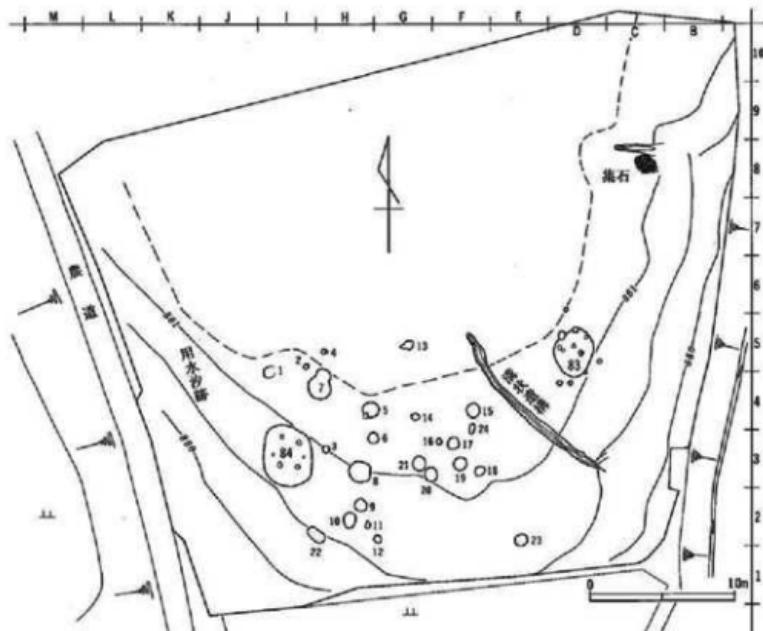
第1図 曾利遺跡付近地形図 (1:2,500)
1 大花 2 曾利 3 井戸尻 4 日向

ら、およそ750mほど続いている。上手から新田平・^{あたひら}大花・曾利の遺跡が連なり、標高は910m～860mにわたっている。

尾根筋の下手を占める曾利遺跡は、南北300m・東西の最大幅90mの範囲である。その東縁中ほどは渕状に大きく欠けこみ、これを境に尾根幅は半分に減じて尻尾のように終結している。東側は比高差6～7mの沢によって仕切られ、井戸尻遺跡の尾根が並行している。いっぽう西側はなだらかに低くなっている。

調査の経緯

今回、調査の対象となったのは、尾根の末端に当たる個所である。農林漁業用揮発油税身替農道整備事業の富士見南線がこの地点を横断するため、長野県教育委員会・諏訪地方事務所・富士見町教育委員会の三者で協議を行い、工事に先立って発掘を実施することになったのである。それも道路敷によって分断される水田の端田整備の分をふくめて、平出藤陽氏の所有する6,993番の田一筆分、1400m²を調査することになった。



第2図 遺構配置全体図 (1 : 400)

調査のあらまし

調査区全体が田であるため、開田の際に尾根の高い部分を削って低い部分に埋めた土が相当量あることが予想された。まず、この埋土と地形を剥ぎ取る作業を重機で行った。その結果、調査区東側と南西側は埋土が厚く、除去に手間取った。いっぽう田の北半、尾根の頂部は平らに広く削られていた。開田の際にどれくらい削り取ったか定かではないが、上土手側には平均120cmの石積みがみられるところから、これを越えるものではないようだ。

発掘は最初に北半分を調査し、重機で土を盛り返してから、南半分の小豎穴群、住居址の順に行った。

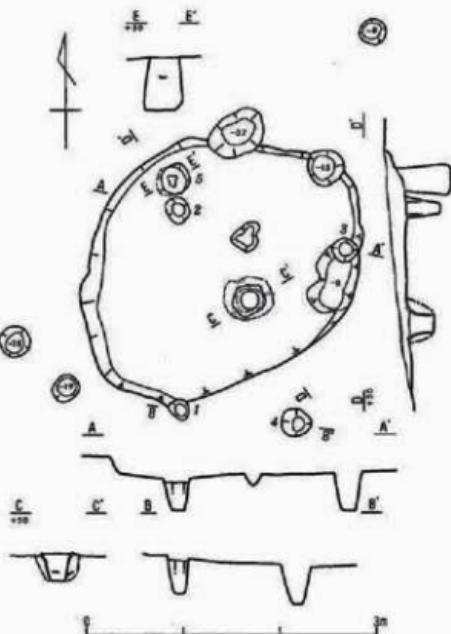
2 遺構と遺物

発掘の結果、調査区からは落沢期の住居址2軒、小豎穴もしくは土壙23基、集石1基を検出した。これらの遺構配置をみると、集石はすこし北に離れた尾根の東縁にあり、尾根中央の小豎穴もしくは土壙をはさんで東側と西側にそれぞれ住居址が対峙していて、規模の小さな村の様子を見て取ることができる。この他に、西側の農道に沿う用水汐の跡と、土器などを埋めた溝が見つかった。

住居址

第83号住居址

本址は発掘区の東側、尾根の東縁に位置する。表土剥ぎで田の地形を重機で除去すると径3mの黒色の落ち込みが見え、土器の小破片と四石(5)が出土したので、落ち込みの



第3図 第83号住居址 (1:60)

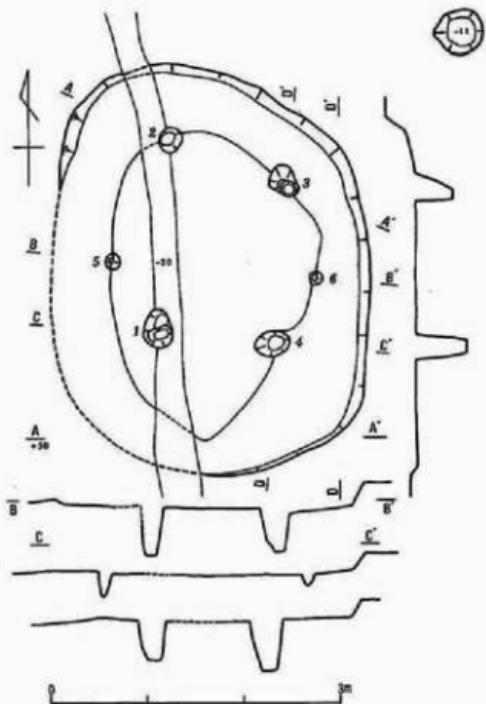
大きさ等を勘案し、住居址と判断した。また精査するに従って、周辺からはいくつか小形の穴が検出された。

竪穴は暗褐色から黒褐色の炭まじり土で埋まっていた。住居の中ほどには埋甕炉があり、4本の主柱穴と貯蔵穴が配されている。南東側を除きロームの壁が回るが、最も深いところで堀込みは20cmほどで、立ち上がりも緩い。床はP1・P4の南側を除きハードロームで、全体が堅い。

主柱穴は4本で、P1・P2では柱底が確認できた。P1・P2・P3を結んだそれぞれの距離および角度は84号址のものとびたり重なる。当時、何らかの規格があったのかも知れない。

貯蔵穴は北側の壁近くにあって、P2のすぐ脇に位置する。いわゆる巾着形で底が広い。しまりなくふわふわとした黒色土が詰まっていた。穴の中、縁から20cmのところに内面を向けた深鉢(2)が見出され、他に小形の石鋤先(4)と拳の半分ほどの安山岩礫1個、土器片いくらかが入っていた。

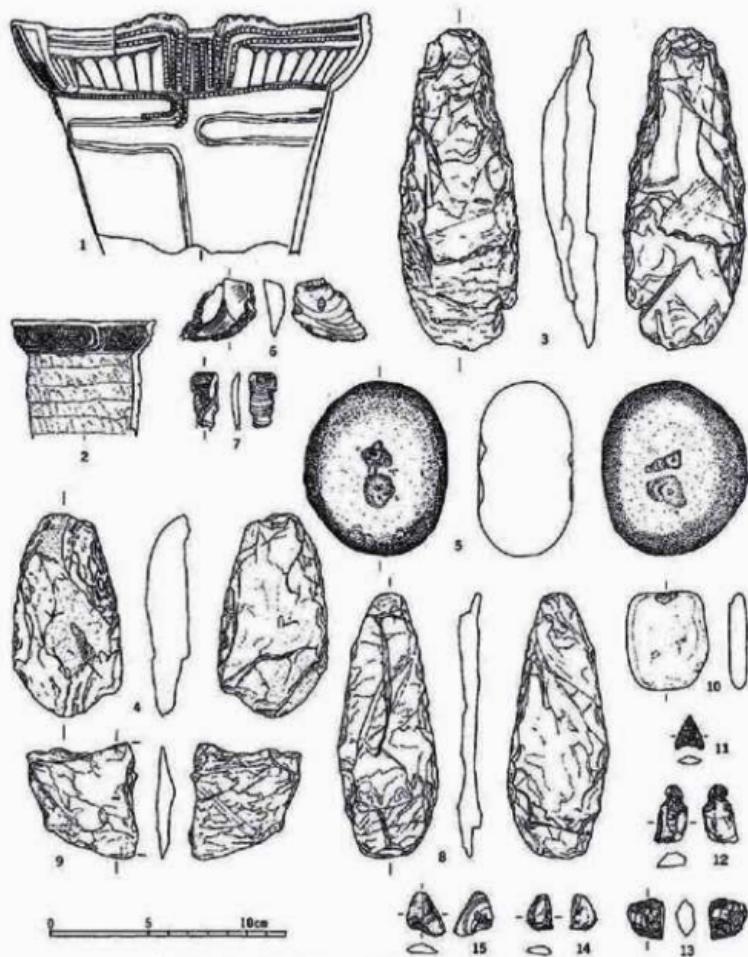
埋甕炉は住居のはば中央にあり、口縁を少しだけ床上に出して埋設されている。土器の中に



第4図 第84号住居址 (1:60)

はローム粒子を含むしまりのない暗褐色土が詰まっていて、上面と下面に微量の焼土粒がみられた。焼土や灰はなかった。口縁の外周、ちょうど掘り方境までの範囲は、厚さ4cmくらいに焼けて赤色化している。底も僅かに赤味をおびている。埋甕炉の中および掘り方内から、別な土器の口縁部と胴部の破片がそれぞれ出土した。おそらく、古い埋甕炉の残欠であろう。掘り方が大きいのは、古い埋設土器に合わせて掘られたためと推測される。

本址から出土した遺物はさほど多くない。1は埋設土器で胴部下半を失す。口縁部文様帶は二対四単位、九兵衛尾根式期の施文手法が残っている。頭



第5図 83・84号址出土の土器・石器 (1, 2 : %, 3-7 : 83号址 8-15 : 84号址)

3, 10 : スレート 4 : 硬砂岩 5 : 蝦夷安山岩

8, 9 : ホルンフェルス 6, 7, 11-15 : 黒曜石

部から下方には、断面三角形の隆線がクランク状に垂下している。また、これに添えられた押引きは、いずれの個所も隆線の中途で終えている。胴部内面は煮炊きによる肌荒れが目立つ。2は貯藏穴内より出土したもので、二分の一周が残存。口縁部の文様は押引きが主で、鋸歯状に引かれた押引きのあいだは、施文具の尖端を突いて三日月状の連続文様でうめている。外面

は煤けて黒くなっている。

3は打製石鋸。身はわりと厚く、背面の殆どが裸皮である。4は小型の石鋸で貯蔵穴より出土。U字形の刃部はよく使われて磨耗している。5は両面に二個ずつくぼみのある凹石。6は剥片石器。縁辺に刃部をつくっている。7は黒曜石の剥片。

第84号住居址

本址は発掘区の西側、南西にすこし傾いた尾根の縁に位置する。本址の中央やや西寄りは、南北に走る溝で一部損われている。東側にもやはり同じ溝が延びてきており、壁の一部にかかっている。住居西壁の立ち上がりは、尾根の傾斜がわりときつくて検出することができなかつた。長軸4.2m、短軸3.7mの楕円形を呈する。主柱穴は4本。対角するP1・P3の柱穴は、形状がすこぶるよく似ている。別に、短軸上には小さな柱穴が相対している。炉はない。床は平坦で、柱を結んだ外側がすこし高くなっている。床は中央がわりと堅く、外側にいくに従い堅さが減じる。

とくに注意されるのは柱間で、P1、P2、P3を結んだそれぞれの距離および角度は、83号址のそれとぴたり重なる。こうした状況と、小竪穴群をはさんで83号・84号址が東と西に対峙しているという遺構の配置から、互いが同時に存在していた可能性が大きいと判断される。

遺物はわりと多く出土したが、土器はみな小破片であった。押引き文様の土器片が目立つ。8は身が薄く、均整のとれた石鋸。9は打製の石庖丁で、半分のみ。外湾刃である。10は一端にのみ打ち欠きのある石鋸。11は石鋸。15は石鋸の未成品。13はビエス・エスキューで、二封四個所に特有の打撃痕がある。12・14は剥片石器。12には摘まみがついている。14は縁辺に刃こぼれ痕がある。

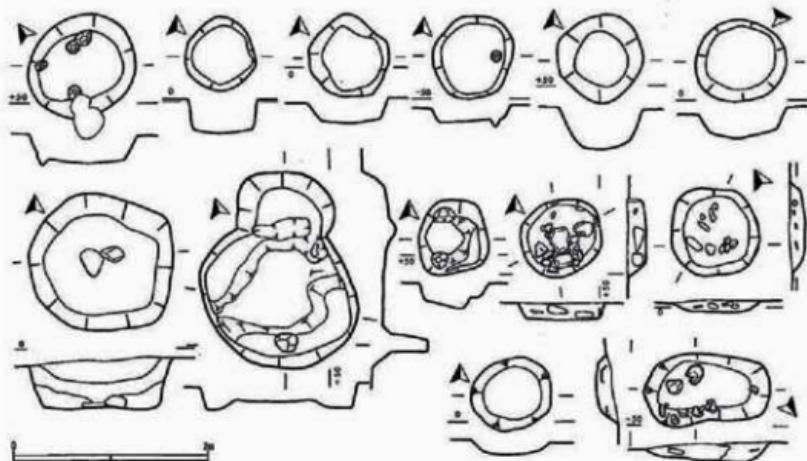
小竪穴群

平面が円形で断面が盤状を呈する穴を主体に、小穴あるいは柱状の穴を括して小竪穴とした。これらの多くは暗褐色土が詰まっているだけだが、安山岩など大小の石が入っているもの、石器や土器が入っているものなどがある。これらは墓標の石であったり、副葬品と考えられるから、穴の大半は墓の可能性が大きい。

これら小竪穴の時期であるが、判別できたものは名沢期に属するものであった。

1号 84号址の北側にあり、溝によって半分を失する。堆土は褐色土で5mm大のローム粒が少し入っている。炭は全くない。最大径74cm、深さ10cm。チャート製の剥片1個と土器片2個が出土。

2号 暗褐色土で、上面には細かな炭が多量に入っていた。住居の柱穴に似ている。最大径29cm、深さ18cm。



第6図 小 竪 穴 (1:60)
上段左から5, 6, 9, 10, 15, 20号 中段左から8, 7, 17, 19, 21号 下段23, 22号

3号 84号址の東側に位置する。底面はすこし西へ傾いている。最大径48cm、深さ10cm。

4号 暗褐色土で、2号と同じ形状である。粘板岩製の鉢先と下方から深鉢の大きな破片が出土した。

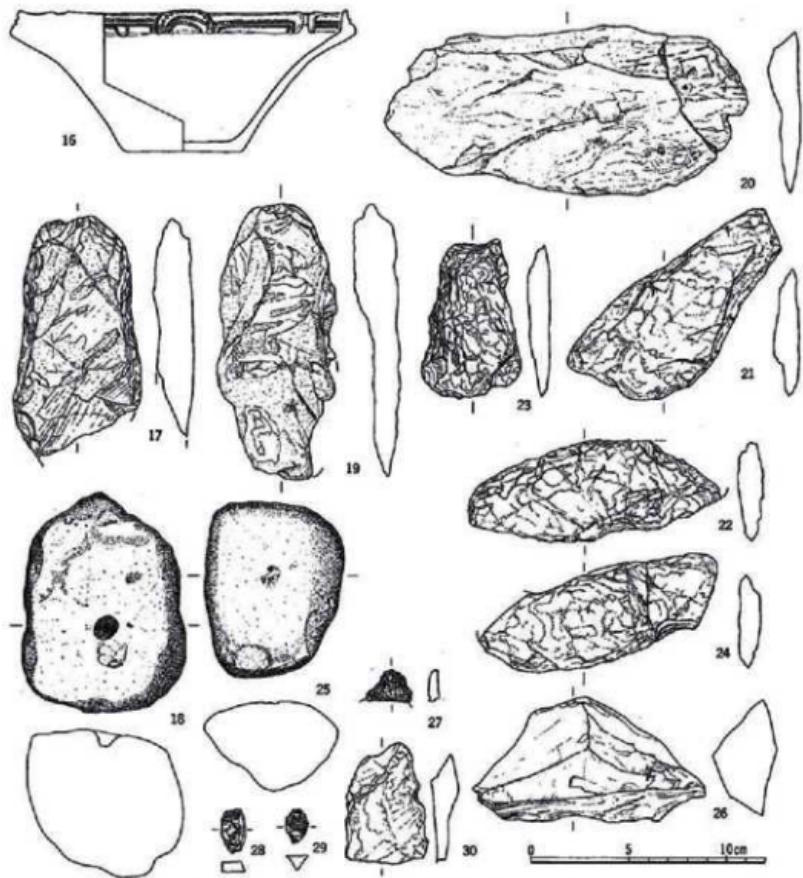
5号 南側の一部は松の根による搅乱を受けている。土層は上方が黒色土、下方が褐色土である。立ち上がり部分には、杭状の小穴が4個所ある。

6号 堆土は上部が暗褐色、下部は黄褐色土にローム塊の混じる土。立ち上がりは直で、わりと均整のとれた筒形の穴。中央が少し低くなっている。

7号 新旧の切り合があるが、はっきりとしなかった。堆土は黒褐色土でハードローム塊を含んでいる。下方に炭の細粒がみられた。南側の穴は、中央が高くなっていて、隣に杭状の柱穴がある。北の穴からは粘板岩製の鉢先と土器片2個が出土。南の穴からはホルンフェルス製の石片(26)と、両手分の土器片が出土した。

8号 少し角張るが、円形の大きな穴。底部真ん中に、輝緑岩の平石が置かれ、小児の頭ほどの大安山岩がその肩に載るようにしてあった。土層は上から黒色土、褐色土、黄褐色土の順である。底面は全体にすこし堅い。中からは小形の鉢(23)、雑形鉢(24)、拳大の粗製凹石(25)、石庖丁の破片二つと土器は深鉢三分の一程度と、押引き文の施された落涙式を含む両手一杯分が出土した。

9号 9号から12号までは、褐色土に炭の混じる堆土で、大豆大的ローム粒が入っていた。本址の底は凸凹していて堅い。土器片1個出土。



第7図 小豎穴出土の土器・石器(%) 16:1/6

16・17・18:22号 19~22・27:21号 23・24・25:8号 26:7号 28~30:集石

17:硬砂岩 18・25:単斜輝石斜方輝石角閃石安山岩 19・20:砂岩ホルンフェルス

21:粘板岩ホルンフェルス 22, 23:粘板岩 24, 26・30:ホルンフェルス

27~29:黒曜石

10号 きれいな円形で、底は西側へ傾斜しているが平坦である。東側に一つ杭状の小穴がある。
土器片1個出土。

11号 長軸46cm、短軸30cm、深さ12cm。

12号 小さいが圓くてきれいな穴。底は凸凹し、東へ低くなっている。深さ27cm。

13号 上層は黒褐色、下層は暗褐色で炭の少し混じる土。段々に低くなって、底となる。最も

深い個所で12cm。

14号 暗褐色で炭混りの堆土。柱穴状である。深さ29cm。

15号 黒褐色土で、炭と小豆大のローム粒をわりと多く含む。拳大の安山岩礫、粘板製の石庵丁と硬砂岩製の石鎌状石器の破片、黒曜石剝片が各1個ずつ出土。それに片手分の土器片が出士した。

16号 暗褐色土。上端・下端とも歪みがあり、はっきりしない穴。深さは15cm。

17号 上部は暗褐色、下部は炭とローム粒混りの褐色土が結まっていた。東側中段に三日月形のテラスがある。

18号 炭を微量にふくむ暗褐色の堆土。平面は橢円に近い形。長軸68cm、短軸56cm。手の平大の安山岩の板状石1個と土器片5個が出土した。

19号 黒褐色土。穴の上面に大小の礫と浅鉢片がかたまっていた。大きな礫の一つに、花崗斑岩があった。他に押引き文のある深鉢の破片が片手分と、漆と思われる黒色塗料が付いている土器片が出土した。浅鉢は口縁が「く」の字に内傾していて、そこには3本の細い押引き文が一周している。二分の一側面で口縁から底部まであるが接合しない。

20号 炭と小豆大のローム粒を含む褐色土で、よくしまっている。中央がいちばん低くなって、緩く立ち上がる鍋底。土器片一片のみ出土。

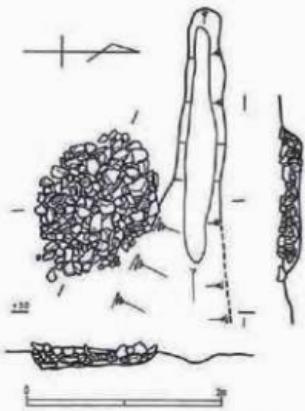
21号 堆土は暗褐色土で炭を多く含む土。各種石器(19~22・27)と安山岩の小礫、板状の礫と土器片が穴一面に広がっていた。これらは副葬品と考えられる。19は錐状の刃部を有す石器。中ほどから刃先にかけては、薄身である。20は大形の石庵丁。外湾刃で刃線は真っ直ぐ通っている。ところどころに、刃こぼれの痕がみられる。21は靴形石器。背は平らで外湾刃である。22は靴形石器に類似する石器。上下の稜線の一部は敲いてつぶしてあり、下方はすこし抉れている。27は小形石器の破片である。黒曜石製。

22号 北側が炭まじりの漆黒土で、南側が暗褐ないしは黒褐色の炭まじりの土。唯一、細長の形をとる。東側は縁に沿って、石器(17・18)や浅鉢片(16)および安山岩の礫が並んでいる。南西側には浅鉢が正位で、その東には手の平大の安山岩が床に近い所に据えてある。片手分ほど出た土器片の中には、新道期に属する破片が混じっていた。17は錐状の刃部になると思われる石器。18は大形の粗製凹石。いずれも副葬品と考えられる。

23号 褐色土。立ち上がりの緩い中華鍋底。深さ15cm。

集 石

発掘区の上手、尾根の東縁に設けられている。長軸1.6m、短軸1.3mの円形を呈し、小さいのは親指大から大きいのは両手の平大まで347個の安山岩を用いて、平均20cmの厚さに積んで



第8図 集 石 (1:60)

ある。集石の上面と集石内には、周囲にはみられない真黒な土が認められた。また、集石の下部には暗褐色の土が詰まっていた。小豆から大豆大の石材の炭が多く入っていた。中からはホルンフェルス製の小さな刺片(30)と、ピエス・エスキーユ(29)、黒曜石製の石核(28)が出土した。土器片など時代の判るものは出土していないが、住居と同時期と思われる。

溝状遺構

83号址の南、小窓穴群との間に確認された。同様なものは、集石の北側、84号址内および同址の東側にもあった。完掘したのは83号址の南側と集石の北側のもので、他は部分的な調査に止めた。これは開田の際、出てきた石器や土器を「天狗の持ち物」「天狗の茶碗」と忌み嫌って、地主が溝を掘って埋めた跡である。溝の中からは石器や土器の大小の破片が多量に出土した。

3 調査の成果と課題

今回の調査は、尾根末端の区域であり、遺跡の範囲を捉えること、あわせて遺構の分布や聚落の内容を把握するという点で、いくつかの成果を得ることができた。

一つは、過去の調査では一軒しか所在のしらべていなかった(67号址)中期前葉の猪沢式期の住居が二軒発見されたことである。このことによって該期の聚落は、67号址を上限とし、現考古館の駐車場を中心とするような広がりを想定することができる。二つは、住居とあわせ墓や集石など、聚落の具体的な様子が知れたことである。墓を中心とした遺構の配置は、広場と称する空間こそないが、いわゆる環状聚落の小型版を思わせる。また、住居が墓群を挟んで東と西に対峙しているあり様は、二戸一対で一組として捉えることが可能であり、村を構成する単位の一つと考えられる。

ところで、該期の遺構や遺物は隣接する井戸尻遺跡でも、同じく農免道路に伴う調査で確認されている。近年、沢を挟んで対峙する尾根には同一時期の聚落があって、両者が深いつながりを有している、ということが解ってきている。こうしたことから、曾利と井戸尻のそれぞれの聚落の関係を明らかにしていくことが、今後の課題であろう。



井戸尻遺跡より発掘区を望む



調査風景(北東より)

図版 2



83号住居址(北東より)



埋甕炉



84号住居址(西より)



集石(西より)

図版 4



小竖穴群 (南より)



左上：8号　左下：21号竖穴



右上：19号　右下：22号小竖穴



曾利遺跡

—農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—

発行 1993年3月19日
編集行 富士見町教育委員会
印刷 日本ハイコム株式会社
塩尻市北小野4724 TEL0263-56-2111
